

第五十二表 樽前山噴火

年月日	同上(西曆)	記事
寛文七年八月(?)	一六六七 <sup>年</sup> 九月 <sup>月</sup> 一日 <sup>日</sup>	松前山崩レ其響キ當國聞ユ。 <small>(津輕秘鑑)</small>
元文四年七月十四日	一七三九 八一 <sup>九</sup>	〔樽前山若クハ有珠岳ノ噴火ナルガ如シ〕 松前山崩レ震當地ニ及ブ。 <small>(津輕秘鑑)</small> 「元文四乙未年七月十二日地震、同十四日ヨリ二十六日迄山鳴リ」タルマイ「嶽燒ク、而シテ下蝦夷地 <small>(俗ニ東蝦夷ヲヒ西蝦夷ヲ上)</small> タルマイ」近所二三日ノ内晝夜暗ク燒灰降ル。 <small>(松前年々記、震蝦夷地ト云フ)</small> 告第六十四號大井上) 理學士報文ニヨル)
明治四年十二月二十五日(?)	一八七一	十二月二十五日樽前岳大噴火ヲ初メ三日二夜火山砂礫南ニ向テ降下シ字別々ニテハ八寸程積リタリト云フ、從來樽前岳中央部ハ傾斜緩ナル饅頭狀小丘ニシテ今日ノ火口壁ノ最高所ヨリモ約十米モ高クシテ西方ニ噴氣孔數箇存シ絶ヘズ噴孔ニ硫黄ヲ昇華シ東方ニハ噴氣孔ハナキモ硫黄礦ハ多量ニ存在シ、函館山田文右衛門ナルモノ其ノ硫黄ヲ探掘シ牛背ヲ以テ山頂ヨリ樽前村ニ運ビ居リタリシガ、當日ノ大噴火ノ爲メ小丘ハ大部分抛出セラレ深サ約百米ノ凹地ト變シ、嘗テ外輪山ト中央小丘トノ中間ニ一個ノ溜ヲ存セシガ爆裂ノ爲メ外輪山南部ノ一壁缺潰シ湖水ハ之ヨリ流出シ全ク涸水セリト、而シテ數年後噴火口ニ入リテ硫黄ヲ探掘シタルコトアリシガ火口底ニハ當時東西ニ長ク四乃至五米ノ一湖アリテ宛モ瓢箪

年月日

同上 (西曆)

記事

明治七年二月八日

一八七四年 二月 八日

形ヲナセリ、明治三十五年頃マデ其湖水ハ存在セシモノ、如シト云フ。  
(大井上理學士報文ニヨル、明治七年ノ噴火ト混同セルモノ、如シト云フ)

札幌本廳ヨリ官員派遣實際檢査ノ復命書

二月九日天晴レ寒薄シ午前六時札幌ヲ發シ行程四里ニシテ「ワッチ」ニ至リ南方ニ中リ俄然黑煙起リ頭上ヲ掩フ天色朦朧硫黃ノ氣鼻ヲ穿ツ小焉アリテ雲烟飛散シテ又晴光ヲ見ル左右密林ニシテ何レノ方位ナルヲ辨ズル能ハズ地上ノ積雪降灰ノ爲ニ色ヲ變ズ午後一時島松驛ニ至リ一旅人ノ今曉苦小牧驛ヲ發シ來ルモノニ遇ヒ問テ其實ヲ聞クヲ得レドモ詳ナル能ハズ一里餘「イサリ」ニ至ル初テ樽前山ヲ西南ニ見ル頂上白烟ヲ噴キ風ニ從テ搖曳シ三里半餘千歲驛ニ投シ在勤官員ニ面會シテ之ヲ問フニ人馬ノ傷害之レナキ由驛ノ近傍沙灰堆ヲ爲ス厚サ三四分ナリ第八時鳴動一聲地震フ門外ニ出テ之レヲ見ルニ樽前山ノ方ニ中リ黑煙沸騰電光激發スル數次ニシテ止ミ黑煙風ニ從テ北ニ散ジ昨日ヨリ數々鳴動シ人民狼狽傷害アラシク恐ル在勤官員ト共ニ之ヲ懇諭シ各其堵ニ安ンゼシム。

十日午前第六時發程天晴風軟寒ヲ覺エズ路傍ノ堆沙深サ五六分、四里ニシテ「トキサラマフ」ニ出ヅ野ニ牧スル所ノ馬背灰ヲ被リ班毛ニ似タリ此邊ノ川流盡ク濁水ト爲レ共人家無キヲ以テ幸ニ飲料ヲ缺クノ憂ナシ二里三十四町苦小牧驛ニ至リ在勤官員ニ面會シ其景況ヲ問ヘバ曰ク八日午前第十一時二十五分雷鳴一聲天色忽チ昏黑其時ナラザルヲ怪ミ戸ヲ出ヅ之

ヲ見レバ樽前山ノ絶頂噴火猛烈黒煙直上天ニ際シ煙中ヨリ電光激射名狀  
ス可ラズ人皆恐怖周章ス土人ハ團欒シ(ガムイ)方言鬼神ヲ祈念ス須臾ニシ  
テ灰沙礫降ルコト雨ノ如シ午後二時三十分黒煙風ニ從ヒ南洋ニ散ス三時  
十分又發シ四時十五分ニ至テ止ム六時再ビ鳴動甚シク家屋皆震フ噴火ノ  
猛烈ナル前ニ十倍シ電光ノ激射モ亦烈ニ鳴動止マズ砂礫ヲ雨ラス最モ多  
シ十一時ヲ過ギテ鳴動漸ク止ミ黒煙稍々散シ天色爽朗列星ノ燦然タルヲ  
見ル其後時々鳴動スレドモ勢次第ニ衰ヘ人始メテ蘇生ノ思ヲナス翌九日  
時々鳴動スレドモ漸次衰滅セリ人馬傷害ニ罹ルモノナシト、郡中ヲ巡視  
スルニ燒石灰沙地ニ積ル多キモノハ一尺五寸石ノ大サ一二寸乃至三四寸  
皆燒鑠シ本質ヲ失ヒ輕石ニ化ス。

十一日天晴山頂ニ登リ實地ヲ檢セントスレドモ鳴動未ダ止マザルヲ以テ  
果サズ白老郡ハ西其山ヲ距ル僅ニ三里ナレドモ沙石ヲ降サズ其噴裂ノ激  
射スル偏ニ南ニ在リ故ニ白老以西ハ皆其害ヲ被ラズ。

十二日天氣晴朗第六時三十分苦小牧驛ヲ發シ千歲驛ニ宿ス。

十三日晴レ火山ニ登ルヲ謀リ土人ヲ以テ導ト爲ス驛山ヲ距ル八里千歲川  
ニ沿テ行クコト三里餘「フエホ」ニ到ル雪深クシテ腰ヲ沒ス歩ヲ移ス太ハ  
タ難シ而シテ天氣頓ニ變ジ北風雪ヲ捲キ咫尺ヲ辨セズ遂ニ行ヲ果サズ。

十四日札幌ニ復命ス。(開拓使日誌、大井上  
理學士報文ニヨル)

樽前山噴火シ、電光激射、灰砂降ルコト雨ノ如シ、震動數回三日ニシテ  
止ム。(北海  
道志)「明治七年ノ春鳴動噴火シ黒煙天ヲ衝キ淡褐色ノ灰砂飛散原

年月日

同上 (西曆)

記事

明治十六年十一月五日

一八八三年十一月五日

同 十八年一月四日

一八八五年一月四日

同 十九年四月十三日

一八八六年四月十三日

同 十九年四月十五日

一八八六年四月十五日

同 十九年四月十六日

一八八六年四月十六日

野堆ヲ爲セリ。(北海道志)

二月十六日午後二時頃ヨリ樽前山破裂シ七時頃ヨリ灰ヲ降シ終夜震動シ曉ニ至リテ止ム市民(札幌)是ニ驚キシニヤアラン十七日ノ夜逃亡者前日ヨリ多シ。(札幌沿革史、大井上)

噴火シ其燒灰札幌市街ニ吹キ降ル。(同上)

膽振樽前山噴火、直衝數千間。(日本災異志)一月四日午後四時三十分樽前山ヨリ俄ニ方千間許ノ黑煙噴出、其噴騰スル凡ソ數千間、風弱其煙煤漸次樽前

村近傍ヨリ海面ニ沿ヒ鵠川方面海中ニ降下セシモノ、如シ別段人畜等ニハ障碍ナシ噴煙ニ當リ震動ヲ感セシ時間ハ僅カニ五秒内外ニ過キササルベシ。(日本地震學會報告書)

未明噴火シ黑煙昇騰スル概ネ二百間、本山ノ東北三里餘ノ地ニ灰ヲ降ラシ堆積スルコト凡ソ二三分ニ至レリ、本曉天晴レ星明ニシテ微西風アリ、別ニ鳴動ヲ感ゼズ。(北海道廳噴火調査ニヨル)

午後二時噴火黑煙飛騰スルコト恰モ前日ノ如ク灰ノ飛散スルコト東南二里許ニ涉レリ此ノ日天氣晴和ニシテ西北ノ弱風吹キタリ、別ニ鳴動ヲ覺ヘズ。(同上)

午前十時五十分噴火黑煙昇騰スルコト凡ソ千間ニシテ北方ニ飛散セリ、其勢ノ猛烈ナル前日ノ比ニ非ズ、灰ヲ降ラス前日ニ異ナラス、此日天氣晴和弱南風アリ、他ニ鳴動ヲ聞カス。以上三回共人畜樹木等ニ障害ナ

シ。

。

。

同 十九年四月二十八日

一八八六 四二八

シ。(上同)

午前四時三十分頃噴火、未明ニ付其狀況詳ナラスト雖、當郡樽前村ヨリ  
勇拂村ニ至ル沿海五六里ノ間噴灰ヲ散布シ爲ニ苦小牧川灰色ノ濁水ヲ流  
シ午前九時ニ至テ稍々常水ニ復セリ。別ニ鳴動ヲ感セス。其後白煙平常  
ヨリ稍々多ク、絶ヘズ昇騰ス、人畜樹木等ニ障害ナシ。(上同)

同 二十年九月三日

一八八七 九三三

午前九時三十分頃樽前山ノ方向ニ於テ遠ク雷鳴スルカ如キ響キヲ感セシ  
カ同四十五分ニ至リ該山突然噴火シ硫煙天ヲ衝クコト殆ド二千間、其景  
狀人ヲシテ悽然寒心セシメ灰煙靨トシテ風位ニ連レ徐ニ飛散セリ。此  
ノ日曇天微西南風アリ、人畜ニ損害ナシ。(上同)

同 二十年十月七日

一八八七 一〇七

午後五時五十分頃噴煙ノ上騰スルコト凡千五百間、十分時ニシテ灰煙北東  
ニ靨キ漸々勇拂郡苦小牧村近傍ノ山野並ニ同村海面等ニ散布シ草葉ニ聊  
カ煙跡ヲ止メタリ、時ニ風位西微。今八日ニ至リテモ引キ續キ噴火スル模  
様ニテ同山ノ頂上ハ霞ノ如ク煙ヲ覆ヒタリ。人畜等ニハ別段害ナシ。(上同)

以上六回ノ爆發記事ハ當時ノ勇拂郡役所ヨリ北海道廳ニ報告セシモノ  
ナリ。

同 二十七年八月十七日

一八九四 八一七

午後六時頃噴煙。(震災豫防調査會報)「噴火口内ノ西側爆發シタルモノナリ。  
(告第四十九號)」噴煙平生ニ十數倍ス、少コシク山面ニ白色ヲ帶バシムル

ニ至ル、午後十一時五分ニモ再ビ微震動アリタリ。(明治二十七年八月二  
十八日根室毎日新聞)

同 四十二年一月二十二日

一九〇九 一二三

二十二日夜初起爆發アリ「ボンニシタツ」良燧社工場附近ニ於テ翌朝積  
雪上ニ降灰ヲ認ム。(北海道廳「噴火」  
調査「ニヨル」)

年月日

同上 (西曆)

記事

明治四十二年二月六日

一九〇九年 二月 六日

午前九時頃噴煙ヲ認ム、降灰アリ。(北海道廳「噴火」調査ニヨル)

同 四十二年二月十日

一九〇九年 二月 一〇日

午後三時頃大砲ノ如キ音響ニ回アリ、噴煙多量ナリ。(同)

同 四十二年二月十八日

一九〇九年 二月 一八日

午後一時頃噴煙ヲ認メタルモ降灰ナシ。(同上)

同 四十二年三月三十日

一九〇九年 三三〇日

午前七時二十分頃、爆發ニ先キタチ約一時間ハ絶ヘズ鳴動ヲ聞キタリ、之ヨリ先キ三月三日ニ午前十一時頃、午後三時頃、同四時半頃ノ三回鳴動ヲ聞キタリ。一月二十二日ヨリ二月十八日迄ノ降灰ハ微細ナルモノナリシガ三月三十日ニハ大豆位ノ砂粒混降セリ。(同上)

以上五件ハ良燧會社工場監督員ノ談ニヨル

午前六時三十分頃ヨリ砲聲ノ如キ音響數回鳴リ渡リ間モナク山頂ニ濃厚ナル白煙ノ昇騰スルヲ見ル、之ニ續キ黑煙發出シ高サ七、六、キロメートルニ達シ、北西風ニ靡カレ南ハ樽前川ヨリ東南苦小牧ニ及ブ、七分ヲ過ギテ第二回ノ噴煙アリ、前者ノ如クナラサルモ該地方ハ前後殆ド二時間黑煙ニ遮ラレ其間略ボ三十分灰砂ヲ降下シタリ」從來ノ火口底内一小部ノ爆裂シタルモノニシテ、火口底ノ北部ニ徑約十五米、深サ約十二米ノ陷沒地アリ即チ新爆裂口ニシテ其拋出物ハ主トシテ北部火口壁上ニ飛散シタリ其大塊トイフモ徑二米ニ滿タズ其ノ量ハ概略二千七百立方米ナリ爆裂ノ際火口底ヲ成セル鎔岩片ヲ拋出シタルノミナラズ、地下ヨリ鎔岩彈ヲ噴出シ、風ニ伴ハレテ大部分ハ南方ニ散布セリ、而シテ火山砂ハ山頂ヨリ八軒南方ニテハ厚サ五耗ニ達シ、東南十二軒ヲ去ル良燧社第一工

同 四十二年四月十二日

一九〇九 四二二

場近傍ニテハ地表ヲ蔽ヒタルニ過ギズ、二十籽ヲ距ツル苦小牧停車場ニテハ三糶平方ニ二三粒ヲ降ラシタルノミ、然レドモ北風ハ猶ホ海上數里ニ及ビテ漁舟ニ降灰ヲ認メタリト云フ、當日降灰區域ハ約八十五平方籽ニ亘レリ。(震災豫防調査會報告第六十四號、大井上埋學士樽前岳噴火報告ニヨル)

十二日午後十一時四十八分大ニ爆發ス、三月三十日ニ比シ殆ド三倍ノ大音響ヲ發シ、家屋ノ震動激甚ニシテ黑煙ノ噴出スル間ヨリ二三分間毎ニ電光ノ閃クガ如キ火光ヲ認メタルモ別ニ降石灰ナシ、(苦小牧ニテモ大音響ト共ニ戸障子震動セリト云フ)十三日ハ噴煙少ナク鳴動ナシ。十四日ハ雨天ニテ望見スルヲ得ズ。十五日午後雨霽レタルニ非常ニ噴煙セルヲ認メタリ。十六日噴煙尙盛ニシテ午後二時頃ヨリ大鳴動アリテ十七日ノ正午頃迄繼續ス、十六日午後八時頃及十七日午前五時頃大鳴動アリシカ十七日ノ午後八時頃ヨリ噴煙次第ニ衰弱セシモ火炎ヲ認メタリ。十八日午前二時三十分望見セルニ依然火炎ノ噴出スルヲ認ム、同日朝ヨリ曇天ナリシモ確カニ噴煙ヲ認メタリ。十九日山頂雲ニ蔽ハレ見ルヲ得ズ。二十日雨天ノ爲メ望見スルヲ得ズ同日午後十時ヨリ又鳴動ヲ始ム。二十一日午前五時頃大鳴動アリテ一時間毎ニ大鳴動起リ午後三時頃ヨリ次第ニ衰ヘ午後七時頃ニ至リテ止ミ噴煙薄弱トナリシモ夜間火炎ヲ認メタリ。二十二日雨天ノ爲メ望見スルヲ得ズ、午後五時頃霽ル噴煙甚シカラズ夜間火炎ヲ認ム、夕刻錦多布停車場ヨリ望ムニ山頂噴煙ノ箇所ニ僅ニ山形ノ隆起セルヲ認メタリ。二十三日噴煙薄弱トナリシモ山形增高シテ山麓

年月日

同上(西曆)

記事

大正六年四月三十日

一九一七年四月三十日

同 六年五月十二日

一九一七年五月十二日

良燧社第一工場ヨリモ認ムルヲ得ルニ至リ夜間ニ火炎ヲ認メタリ。(良燧社第一工場監督員治田久氏ノ談、北海道廳「噴火調査」ニヨル)

爆發當時ハ風位前回ト異ナリ南東乃至南西ナリシ爲メ苫小牧、錦多布等ニハ降灰ナク只山腹東部ノ第三工場附近ニ直徑三四寸ノ燒石ヲ降下シタル外、多ク千歳ヨリ栗山ニ至ル間ニ飛散シ札幌附近ニモ微細ナル降灰僅少ヲ認メタリ。(北海道廳「噴火調査」)

鎔岩ハ火口ヨリ溢出スルコトナク、深サ六十五米ナル火口中ノ絕壁部ヲ滿シ更ニ之レヨリ上部ニ突出スルコト百三十四米ニシテ從來ノ山頂ヨリ高キコト四十米ナリ、其形饅頭狀ヲ呈シ頂上ニハ火口ノ如キモノヲ見ズ此新山ノ容積ヲ概算スルニ約二千萬立方米アリ二十一日ニハ明ニ白老停車場ヨリモ新山ヲ望見スルヲ得タリ、新山ハ十七日夕刻ヨリ十九日夕刻ノ間ニ生ジタルモノナルベシ。(震災豫防調査會報告第六十四號、大井上理學士報文ニヨル)

午後二時五十分頃ヨリ鳴動シ三時二分ニ至リ明治四十二年湧出新鎔岩圓丘ノ東南側面ヨリ噴煙ス約三十分ヲ經過シテ苫小牧市街附近ニ約五分間降灰セリ。(大森復「命書」)

新鎔岩圓丘ニ東々北、西々南方向ノ大裂罅ヲ生ジ、午前十時半頃噴煙ス。王子製紙會社ヨリノ報告ニヨレバ破裂ハ前回ヨリモ強ク、同會社發電所ニテハ地震一回ヲ感ジ、鳴動ヲ三十分間聞キタリ。札幌測候所ヨリモ噴煙ヲ望ミ得タリ。(同上)